中日新聞　（第3種郵便物認可）

障害児マーク もっと知って

母親団体 春日井まつりでバッジ販売

子どもに障害があることを身に着けたバッジで周囲の人に伝え、理解してもらうため、春日井市の母親グループ「ももやま会」が手作り缶バッジ「ありがとうマーク」の普及を図り、一年余がたった。認知度アップを目指して二十、二十一日の春日井まつりでPRし、バッジを販売する。代表の中村優子さん(四二)は「もっと多くの人に知ってもらい、みんなが温かい気持ちになれるようなまちにしたい」と話す。

（丸山耀平）

息子と一緒にありがとうマークをアピールする中村さん（前列左）と中部大春日丘高インターアクトクラブのメンバーたち（後列）＝春日井市の同校で

発達障害や知的障害は見た目では分かりづらく、気付いてもらえないために不安やつらい思いを抱える親は少なくない。障害があることを伝える缶バッジで気付きを促そうと、昨年八月に作製、販売を始めた。

バッジに描かれるのは、幸せの象徴の青い鳥がくちばしに四つ葉のクローバーをくわえる絵柄。「見守ってくれて ありがとう」とのメッセージを添えて、「ありがとうマーク」の愛称で周知を目指している。

バッジは、裏面に安全ピンを付けたタイプと、ぶら下げるキーホルダータイプがあり、それぞれメッセージありと無しをそろえる。

幸せの青い鳥が四つ葉のクローバーをくわえた「ありがとうマーク」の缶バッジ

販売には春日井市の中部大春日丘高校インターアクトクラブの生徒たちが協力。福祉イベントなどでPR販売してきたため、ある程度認知されてきた。「バッジを着けていると、互いに嫌な思いをしなくて済み、心が軽くなる」という親の声もあるという。

多くの人が行き交う春日井まつりでの販売は認知度アップには絶好の機会。昨年は台風の影響で、祭りが縮小となり販売できなかったため、一層気合が入る。インターアクトクラブの二年生村上奈緒子さん(一七)は「買ってもらわなくても、マークの説明をすることで印象付けたい」と話す。

中村さんは「災害が増えてきている現在、意思表示できない人は困ることもある。このマークが広がってほしい」と願う。バッジは一つ三百円（税込み）。